

【研究ノート】

大学生の文章執筆の実態に関する
調査の試行

— 文章の執筆場面と執筆過程に注目して —

松 浦 年 男

田 村 早 苗

研究ノート

大学生の文章執筆の実態に関する調査の試行 ——文章の執筆場面と執筆過程に注目して——

松浦年男 田村早苗

Toshio MATSUURA Sanae TAMURA

目次

1. はじめに
2. 調査
3. 結果と解釈
4. 結論

[Abstract]

A Preliminary Survey on the Precise Picture of Writing Work by University Students

Improving the writing skills of students is an important issue in higher education. Hokusei Gakuen University offers Japanese expression courses for first-year students. In addition, each department provides the students with opportunities for writing instruction through a graduation research or thesis in specialized seminars. However, confirming that the writing skills of the students are improving is difficult. The reason may be their lack of experience in writing outside of class and opportunity to link them with specialized courses in the department. This study conducted a survey on the writing experience of university students. The results demonstrated that (1) the majority of opportunities are given in classes, (2) students make notes before writing and read their own writing, but other individuals do not review their writing, and (3) students report difficulty with the content or with the choice of expressions congruent with the writing situation. The study suggests collecting basic data that can be used to further enhance the program for the development of Japanese language skills, which is required for second-year students, by continuing the survey.

1. はじめに

大学4年間の教育目標は専門分野や所属する大学等の立場によって様々あるが、その中のひとつに4年間の学習を通じてリテラシーを育てるということがある。このリテラシーに何を設定するかも立場により分かれるところだが、日本語表現に関わる技能（以下、本稿では日本語力と呼ぶ）、情報活用に関わる

技能は欠かせないと思われる。このことは、2008年中央審議会答申「学士課程の構築に向けて」において大学で育てる学士力のひとつとして汎用的技能の中にコミュニケーション・スキルや情報リテラシーが含まれていることから分かる。また、文部科学省（2021）によれば「レポート・論文の書き方などの文章作法を身に付けるためのプログラム」を実施している大学は全体の91.4%にのぼる。こ

キーワード：文章作成，表現技法，2年次プロブレム，共通教育と専門教育の接続

Key words：writing; language arts; 2nd-year problem; connection between general education and specialized course

こから、多くの大学でレポート・論文などの文章作法を早期に身につけさせたいと考えてることが分かる。

このように、大学において日本語力を育てること、そして日本語力としてレポート・論文の書き方などを身につけさせることは、専門分野の別を超えて重要な役割として位置づけられる。そのために大学が行う対応は様々ある。文部科学省(2021)の調査は、日本語力を養成するための科目を設けているか、基礎演習のような科目の中の1コマでそういった内容を扱うかの区別をしていないが、ほとんどの大学で何らかの指導がされているという事実は無視できないだろう。

しかし、大学での4年間の教育を考えたとき、文章作成に関する指導を受ける機会は限定的である。初年次教育において何らかの形で文章技法を扱う大学は多いが、その次は3年次にゼミに配属され、卒業論文や卒業研究を行うときということになる。河合塾(2017)によれば、卒業論文・卒業研究を必修としている割合は、理工農学系で92%、人文科学系で78%、医療系で60%、社会科学系で44%とあるので、出口のタイミングでもう一度指導を受ける学生がそれなりに多いことは分かるかと思う。

しかし、日本語力など汎用的技能、特に文章技法は講義系科目の基礎知識とは異なり、向上させようとしても、1つの科目で身につけられるものではない。むしろ、継続的に書く機会を設けることが必要である。このような視点に立つと、継続的な指導の機会がないまま3年次にゼミに入り、4年次に卒業論文や卒業研究の指導を受けるにしても、初年次に習ったパラグラフや文章構成、引用の方法などといった基本的な知識を忘れてしまうことは十分に考えられる。

これはカリキュラム展開上、2年次に専門学科の基礎的な講義科目が多く配置され、書く機会が失われていることに端を発する。そ

のため松浦(2020)はこれを「2年次プロブレム」と呼んでいる。2年次プロブレムの解決には初年次のほかに2年次、3年次での書く機会の確保が重要となってくる。特に2年次は3年次と違いゼミもないため、この機会の重要性が増してくる。

ただしこれは2年次で初年次教育のような文章技法に関する科目を設置することが最適解とは限らない。むしろ、日常の様々な講義系科目の中で書く機会、添削を受ける機会を提供していく方が効果的であることは十分に考えられる。こういった2年次、3年次での日本語力向上の機会を検討するためには、実際に2年次や3年次の学生の文章執筆に関する実態を検討する必要がある。

そこで、本稿では筆者らが2年次、3年次の学生を対象に試行的に行った文章作成の実態に関する調査について結果を報告する。以下、2節は調査の概要、3節は結果と考察、4節は結論と課題である。

2. 調査

調査は次のようにして行った。期間は2021年11月から22年2月の18週間にかけてオンラインで実施した。回答者は大学および短期大学の2年生ならびに3年生28名である(短期大学生は2年生のみ)。参加者には作成に10分以上かかった文章について、執筆場面と方法(デジタル機器か手書きか)と文字数を報告するよう指示した。執筆場面は以下の5つを設定した。

- (1) a. 授業関連(レポート・ゼミ論文/宿題・作文課題/実習記録・日誌)
- b. 学習関連(志望書・応募動機)
- c. 自主学习(検定試験の記述問題等)
- d. 就活関連
- e. 生活(趣味関連/仕事関連/メール)
- f. その他(自由記述)

文字数はデジタル機器の場合はテキストカウントのできるウェブサイトを利用させ、手書きの場合は200字以内、200～500字、500字以上で概数を報告させた。

そして、各文章の作成過程について、(2)の項目に対してかなり当てはまる、やや当てはまる、あまり当てはまらない、まったく当てはまらないという4件法で回答させた。

- (2) a. ひとつとおり書いた後で読み返した
b. 時間がかかった
c. 表現選びに苦労した
d. 内容を決めるのに苦労した
e. 他の人に文章を見てもらった
f. 辞書で単語を調べた
g. 書く前にメモを取ってアイデアをまとめた

回答はMicrosoft Formsを使用した。参加者には月曜から日曜にかけて作成に10分以上かかった文章を書いたらその都度執筆場面、文字数、作成過程のアンケートに回答するよう指示した。なおその週に作成に10分以上かかる文章を書いていない場合にはその旨を翌週の日曜から火曜日の間に回答させた。参加

者には回答を行った場合に謝礼を支払った。

3. 結果と解釈

調査の結果、844件の回答が集まった。以下ではこの結果を報告する。

3.1. 文章の執筆機会はどこにあるか

まず、執筆場面別の件数を図1に示す。授業関連((1a)および(1f)の自由記述から判断したものも含む)が461件、自主学习(b, cおよびfで大学院対策としたものも含む)が106件、就活関連が32件、生活関連が102件、執筆場面なしが128件、その他(判別不能とみなしたもの)が15件だった。

次に、執筆方法(デジタル機器か手書きか)と執筆場面別にどのくらいの字数を書いたかを見ていく。

まずデジタル機器について見る。基本統計量を表1に示す。授業関連は385件で、平均字数は1334.94字、中央値755字だった。自主学习は41件で、平均字数は656.9字、中央値518字だった。就活関連は20件で、平均字数は556.85字、中央値329字だった。生活関連は85件で、平均字数は904.91字、中央値577

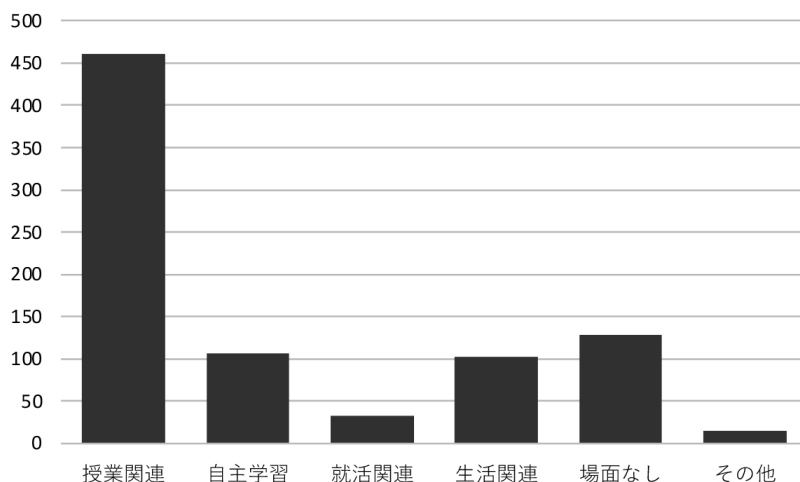


図1：執筆場面別の件数

表 1：執筆場面別の字数の基本統計量（デジタル機器使用時）

1 件あたりの文字量	授業関連	自主学习	就活関連	生活関連
件数	385	41	20	85
平均値	1334.94	656.9	556.85	904.91
最大値	8651	1647	2850	2779
第 3 四分位数 (上位1/4)	1752	886	480.75	1477
中央値	755	518	329	577
第 1 四分位数 (上位3/4)	401	400	258.25	380
最小値	49	175	39	55

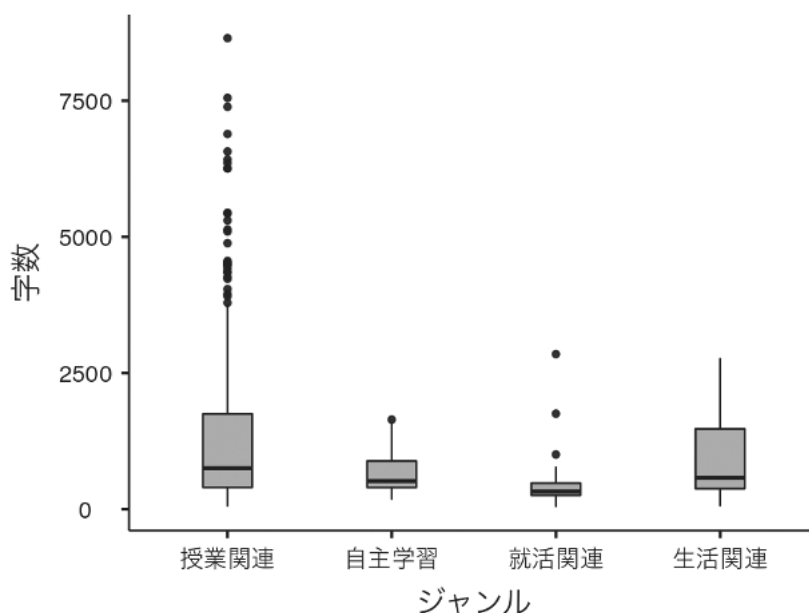


図 2：執筆場面別の字数（デジタル機器）

字だった。箱ひげ図を図 2 に示す。

平均字数を見ると授業関連が圧倒的に多いが、それは一部のデータによるものである。中央値で比較すると執筆場面別の字数は就活関連が短いことを除きそれほどの差は見られない。ここから、長文を書く機会が一部の授業関連の活動に限定されていることを表していることが読み取れる。同様に、授業関連の件数が圧倒的に多いことから、学生の文章執筆機会が授業に大きく依存していることが分かる。

次に、手書きの場合を検討する。基本統計量を表 2 に示す。授業は 59 件で、500 字以上、

200～500 字が多く見られた。自主学习は 65 件で、同様に 500 字以上、200～500 字が多く見られた。就活関連は 12 件で、500 字以上が特に多かった。生活関連は 17 件で 200 字以内、200～500 字がほとんどであった。

このように、手書きの場合、執筆機会は授業関連のほかに自主学习にも多く見られた。就活関連に関しては、1 件あたりの文字数が 500 字を超えるものが半分以上である点が他と異なるが、件数は少なく、必ずしも長文を書く機会を提供するとは言いがたい。これは調査対象が 2, 3 年生だったことも影響して

表 2：執筆場面別の字数（手書き）

1件あたりの文字量	授業関連	自主学习	就活関連	生活関連
500字以上	26	27	7	1
200字～500字	20	23	3	8
200字以内	13	15	2	8
件数	59	65	12	17

いるだろう。

3.2. 文章の長さによって執筆過程は変わるか

文章技法を扱う授業では、文章執筆のステップで、様々なアドバイスをしている。例えば、いきなり執筆をせずアイデアをメモにしてまとめること、執筆後には読み返したり他人の目を通すことなどを指導している。そこで、授業関連の文章についてこれらを含めた執筆過程での作業がどのように行われるのかを検討する。

まず、「書く前にメモを取ってアイデアをまとめた」という項目について検討する。デジタル機器を使用する場合、「かなり当てはまる」と「やや当てはまる」の割合は200字未満では50%を切るが、200字以上であれば半分以上になり、字数が増えるに従って割合は増す。結果を図3に示す。

手書きの場合も類似の傾向が見られ、字数が長くなるとメモを取ってアイデアをまとめる傾向がある。ただし、200～500字において「当てはまらない」の回答が多くを占める点がデジタル機器と異なる。結果を図4に示す。

次に、執筆後の読みなおしと他者のレビューについて記す。まず、「書いた後で読み返した」という項目について、デジタル機器を使用した場合、字数が長くなるにつれ「かなり当てはまる」「やや当てはまる」の回答が増えた。結果を図5に示す。

手書きの場合も同様の傾向が見られたが、同じ200～500字、200字以下でも手書きの方が「かなり当てはまる」と回答した割合は下がっている。だがその一方で「やや当てはまる」まで含めた割合は上がっている。結果を図6に示す。

一方、「他の人に文章を見てもらった」か

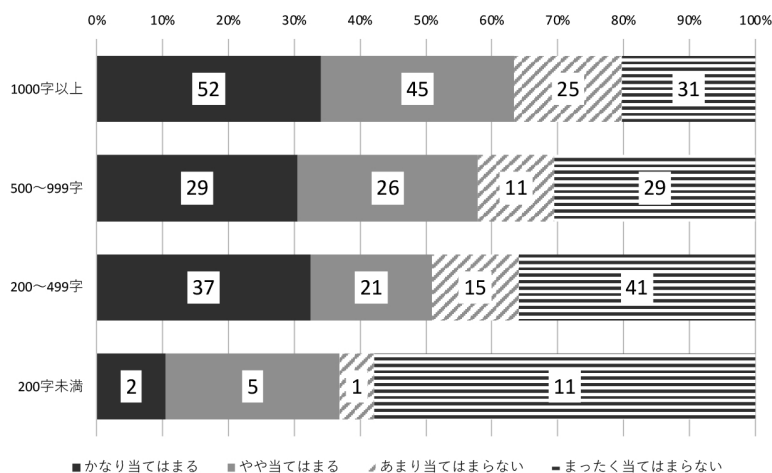


図 3：「書く前にメモを取ってアイデアをまとめた」への回答（デジタル機器）

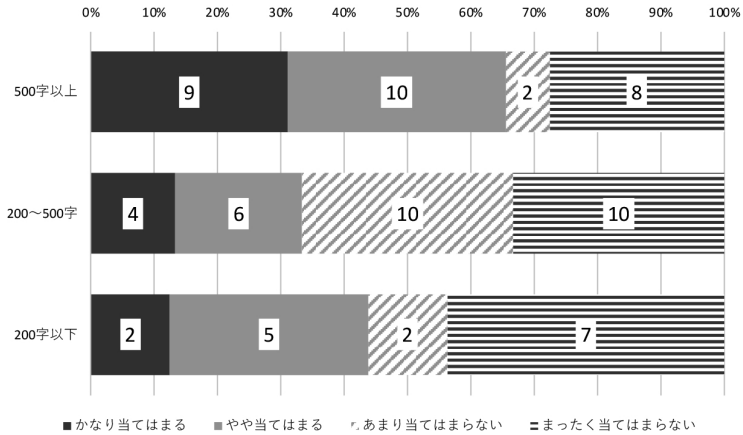


図 4 : 「書く前にメモを取ってアイデアをまとめた」への回答(手書き)

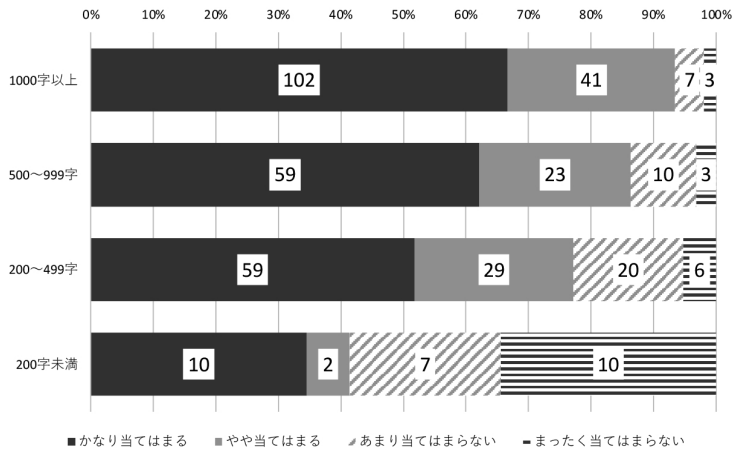


図 5 : 「書いた後で読み返した」への回答(デジタル機器)

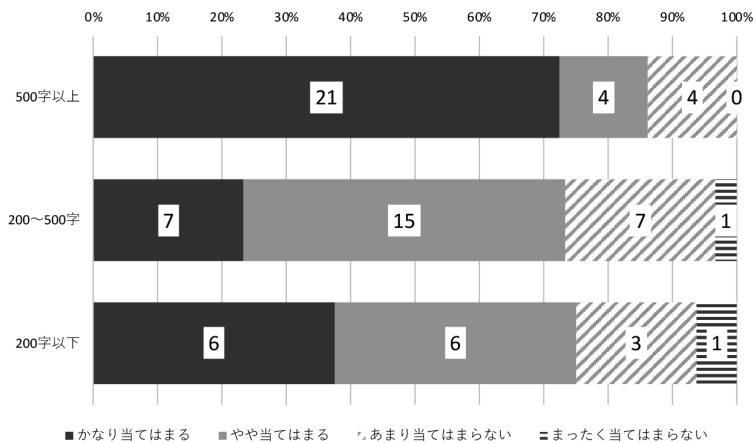


図 6 : 「書いた後で読み返した」への回答(手書き)

への回答を見てみると、執筆方法にかかわらず、「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の回答が多数を占める。結果を図7に示す。

つまり、多くのケースで学生たちは文章を「自分で読み返すが他の人の目を通していない」傾向にあることが分かる。授業関連には多彩な文章が入るので、それが影響したと考える人もいるかもしれない。しかし、レポート・論文に限定したとしても、傾向はほとんど

変わらない。結果を図9に示す。なお、レポート・論文では200字以下の文章を執筆したという回答がなかったため図に含めていない。

まとめると、学生達は授業関連の文章を作成するときには、長さによって事前の準備と自分での読み直しを行うが、他人の目を通すことはほとんどないと言える。

最後に文章の作成過程での作業を学年間で比較する。所属学科によって書く文章の長さや種類が異なることが考えられるため、同一学科

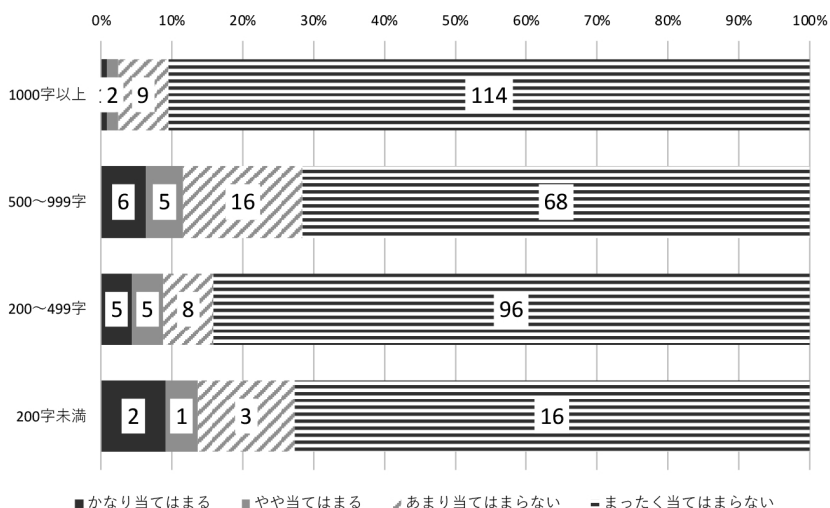


図7：「他の人に文章を見てもらった」への回答（デジタル機器）

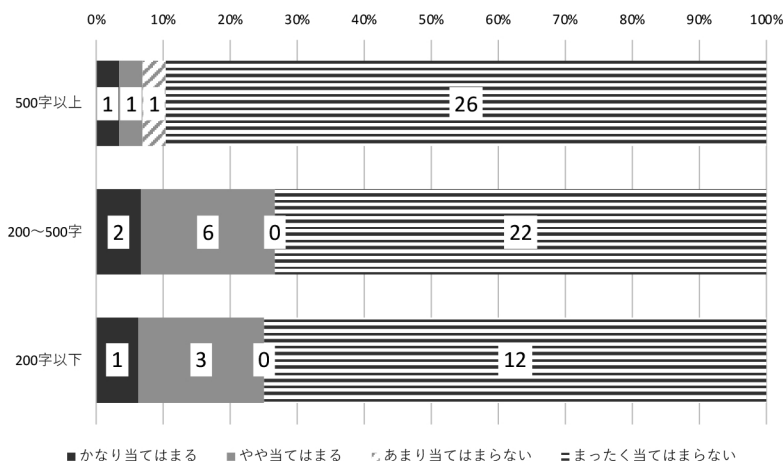


図8：「他の人に文章を見てもらった」への回答（手書き）

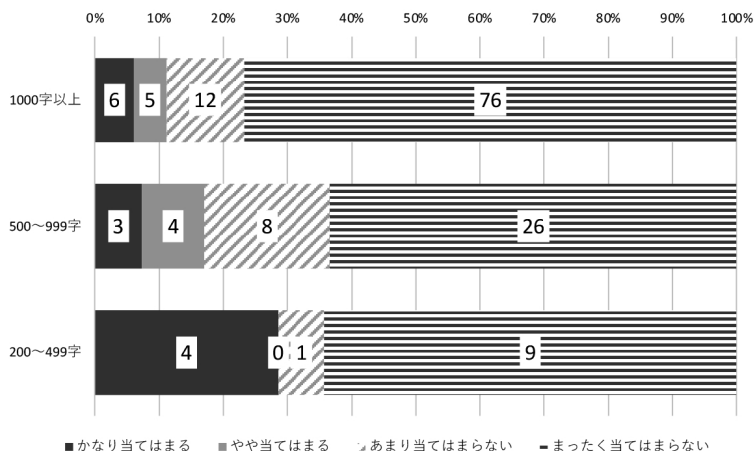


図9：レポート・論文を「他の人に文章を見てもらった」への回答（デジタル機器）

の異学年がいるケースについて、授業関連の文章のうちレポート・論文を対象に見ていく。

まず、「メモの作成」は2年次は70%弱行うのに対して3年次は50%を切っていた。次に、「書いた後の読み直し」は2年次が90%を超えているのに対して、3年次は80%程度だった。最後に「他人のレビュー」は2年次が10%程度なのに対して、3年生は20%程度だった。このように、メモ作りと読み直しは2年次の方が3年次よりも行っている。また、

「他人のレビュー」はどちらの学年も低い。結果を図10に示す。

ここには1年次で身につけた習慣が2年次では残るものの3年次ではまた行われなくなっていく様子が伺える。

3.3. 文章を作成する上での苦労は執筆場面によって変わるのか

文章を作成する際に、慣れた執筆場面の文章は苦労することが少なく、慣れてない執筆

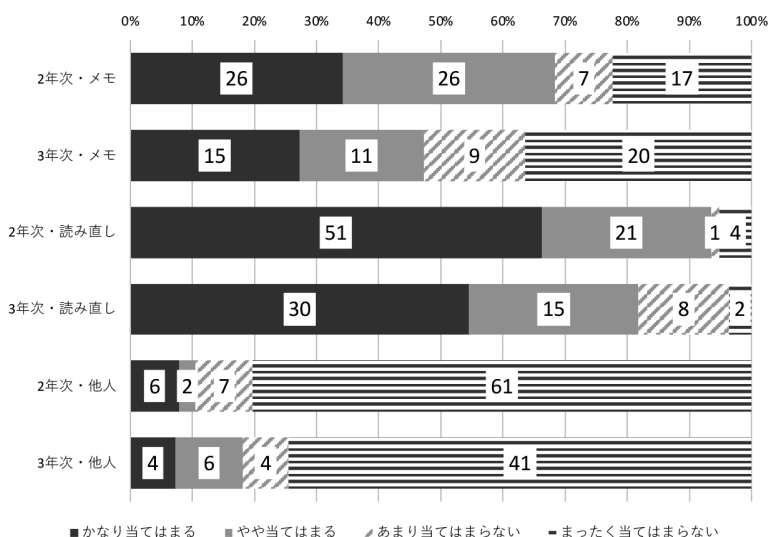


図10：レポート・論文作成作業の学年間の比較

場面の文章には困難を感じる人が多いだろう。本稿の調査でも内容と表現についてそれぞれ苦労したかを尋ねている。その結果を見ていく。

まず「内容を決めるのに苦労した」という設問について検討する。授業関連、就活関連で「当てはまる」が約65%を占めた。また、生活関連はほぼ半分が「当てはまる」と回答した。これらに対して自主学習では「当てはまる」の回答は20%程度だった。執筆場面を比べたとき、授業関連の文章や就活関連の文

章ではアイデアを考えるとところから行う必要があるのに対し、自主学習の場合は何かしらの問題を解くなど、アイデアを作る要素が少ないことが影響していると考えられる。結果を図11に示す。

次に「表現選びに苦労した」という設問を見ていく。この設問では就活関連の文章で約90%が「当てはまる」と回答した。次に多いのが授業関連の文章で、約70%が「当てはまる」と回答した。自主学習と生活関連はともに50~60%程度が「当てはまる」と回答した。

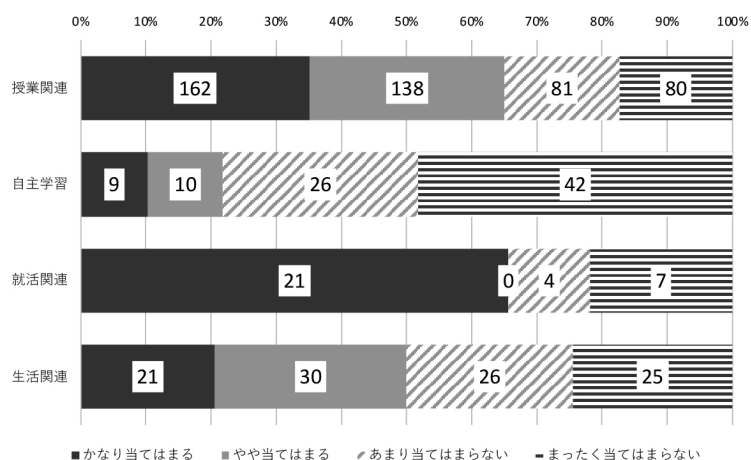


図11：「内容を決めるのに苦労した」への回答

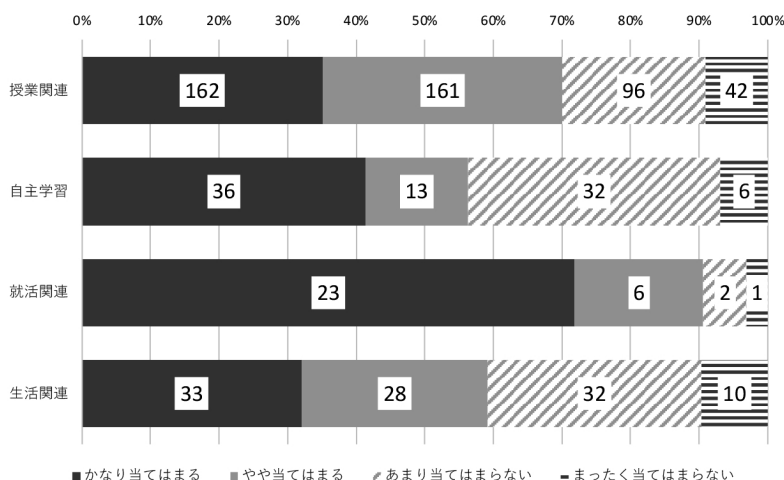


図12：「表現選びに苦労した」への回答

結果を図12に示す。

「内容」に関する結果で自主学習は書く内容が決まっているという可能性に言及したが、「表現」の場合でも「当てはまる」の回答が増えたことは、この可能性を支持しているといえる。

最後に、就活関連の文章で見られた傾向として、「かなり当てはまる」の回答が多くを占めていたことは見逃せない。これは、判断として迷うことがなかったことの現れであろう。つまり、今まで出会ったことがない類の文章を執筆するため苦勞したと推察できる。日本語力に関わる授業はレポート・論文を中心に据えているが、これはレポート・論文を書ければよいということの意味しているのではない。むしろ、見たことがない文章でも対応できるようになっていることが期待されるのだが、現実としてその効果が限定的になっていると読むこともできる。しかしこれをもって例えば「エントリーシートを1年生から書かせる」ことが効果的であると言うつもりは毛頭ない。仮にそういうことをしても、単なる経験以上のものを生まないだろう。むしろ、いかにして授業内容をその授業以外の場面に応用させられるかを考えることが求められる。

4. 結論

本稿では、大学生の文章執筆の実態を明らかにすべく行った調査について報告した。調査の結果、以下の3点が明らかになった。第一に、大学生の文章執筆機会や量は授業関連が多くを占めていた。第二に、文章が長くなるにつれ、メモを作ってから本文を書く、書いた文章を自分で読み返している一方、書いた文章を他の人に読んでもらってはいなかった。また、これらは3年生よりも2年生がより積極的に行っていた。第三に、執筆場面によって内容に関して苦勞するか、表現選びに

苦勞するか異なっていた。

1節で提示した2年次プロブレムに対策するには、文章を執筆する機会を継続的に設けることが必要である。しかし、どういった種類の文章をどの程度、どういう機会に書かせるかを考えるには、文章の執筆に関する実態をより詳細に明らかにする必要がある。筆者達は2022年度も継続的に文章の実態に関する調査を行っている。そこでの結果も踏まえて、引き続き検討を行う。

謝辞

本稿の内容は2021年度北星学園大学文学部FDで行った発表に基づいている。聴衆のみなさんに感謝する。

【参考文献】

- 河合塾 (2017) 「ひらく 日本の大学」2017年度調査結果報告『guideline』2017年11月号, pp.2-25.
<https://www.keinet.ne.jp/magazine/guideline/backnumber/2017.html> (最終アクセス:2022年11月4日)
- 松浦年男 (2020) 「科目設置の苦しさ、環境づくりの大切さ」『看護教育』61(12), pp.1102-1110.
- 文部科学省 (2021) 「大学における教育内容等の改革状況について (令和元年度)」
https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf (最終アクセス:2022年11月2日)